H. v. Kleist と「Phöbus」誌（その4）

松　沢　芳　郎

1 「Phöbus」6号

Phöbus の経済上の危機にからんで Müller が新しい道を進もうと思った時，Phöbus の読者にその意図するところを直接伝えるのを再び義務と感ずる。Walther 書店が10月中に Phöbus 発行を引受けてはいるものの，「Zeitung für die elegante Welt」に発表したように，以前と同じく Gärtner で11月半ばに出版された Phöbus 6号に，Müller は「Kunstkritik. An die Leser des Phödus」と題して載せている。そして今后の Phöbus を「風刺，まじめ，論争，戯詩，あらゆる形式における批評，一つの作品についての多くの批評，全く批評についての批評が現われ，……今后の後半分の号が形成される筈である」と述べて読者自身の Phöbus への参加を求める形にする計画を発表した。それには Müller は一定のテーマを与えて「Schiller の文芸上の生涯の考察」といった方向を提案するのであるが，これは結果的には実現されなかったとみてよい。しかしおそらくKはこの方法には怒っていたのであろう，この6号に載せられたKの「Epigramme」（第2部）のいくつかはこの立腹のあらわれであると考えらる。

この号には Staël 夫人による有名な詩の翻訳「Le retour des Grecs」を載せ，Kはさらに「Michael Kohlhaas」のはじめを載せている。

この「Michael Kohlhaas」は「続く」とあったが，結局「Phöbus」の中では続きは発表されず，1810年に発表された「小説集」第1巻に，これの若干の変更を含めたものに残りを加えて発表された。

後にまだ小説集が発表されない頃，Arnim が W. Grimm に宛てて，1810年2月中旬に「貴兄は Phöbus の中にある彼の Kohlhaas を読みましたか？数少い素晴しい小説を」(L 347) と言っているのに，Böttiger は「Der Freimüthige」1808年12月5日に駄作と酷評はするものの，「結局更に2ダースの v. Kleist 氏の格言的短詩が続き，我が Nr. 3の

早熟の天才［Goethe の息子をさす］
やれやれそれを私は早熟の天才という　実際彼の
両親の結婚式にもう祝婚歌を作ったとさ。

をその上品さと詩の適確さのためにどこへ数えるべきかを知らぬにも拘らず，その詩の一部はそれほど悪くはなかった」とその短嘲詩を誉めている。

この号では最后にわざわざ「スケッチは将来追加して出される」とあったが実行されなかった。

2

その頃まで，夏中Kは頑固に働き続けた筈である，Dresden の環境の中での影響のみられる「Kohlhaas」や「Käthchen」に。

歴史の歩みはこの間にも進んでいて，1808年秋 Napoleon は Weimar に滞在して Alexander I 世と会っている。それ故「毎時間王侯が家来を従えて大変静かなチューリンゲンの

町の中に入城して行くのがみられる」。Théâtre Français が Erfurt で上演する。Dresden も事件のにおいを感じさせられている，即ち絶えずフランス軍が通過し，8月末から10月末まで6万7千の兵が町に宿営している。

3　Phöbus 7号は Böttiger が「Zeitung f. d. elg. Welt」1808年12月12日に「第7号は今はすでに Walther 書店から出ており」と書いているのでおそらく12月始めに出版されている。ただ Böttiger のいう「ただ始めの5号を飾ったスケッチが今后の場合には取り止めになっている」というが，これは6号，7号をみた12月12日の段階での表現であろう。実際更に8号もスケッチはないが，9/10号と11/12号にはスケッチが載せられている。7号には，おそらく Müller の編集の「Philosophische und kritische Miszellen, Beilage zum Phöbus」の中の Einleitung の中で，Aの役でKの意見が述べさせてあるだけであり，1808年末に発行された8号ではKのものは何も載せられていないが，おそらくこのあたりに「Phöbus」をめぐる Müller とKの編集上の争いの決定的な終末に向う顕著な表われの一つとみられるものがあるのだろう。

4　Phöbus 9/10号はおそらく1809年初めに発行された。この号に載ったKの「Zweites Fragment des Schauspiels : Käthchen von Heilbronn」(II/2～13場) は1810年のBerlin での出版本とは，9場と10場の殆んど大部分は完全に相異しており，他の場も出版本よりかなり膨大である。そして大晦日の夜の夢は未だ全く欠けているが，Kが1808年12月8日に Collin に Wien での上演を依頼しているように，「Käthchen von Heilbronn は小生自身がみても必然的に短縮されねばなりませんが，小生の心から任せられる貴君以外の誰の手にも渡す事はできません。どうか貴君の劇場に向くよう存分に改作して下さい。それを上演する Berlin の舞台も短縮しております，そして小生自身も今后恐らく他の舞台のために同じような処置を取るでしょう」(B141)，とすでに完成していて，その中からKが II 幕のみを載せたと考えられるのである。この号には Novalis の「Zur Weinlese」が載せられているので，編集においてKの希望が相当入れられてきていると考えられる。

もう一つ「Kleine Gelegenheitsgedichte」と題してKの5つの詩が載ったが，「2. Jünglingsklage」は Fouqué が1812年9月9日に Carl von Miltitz に「お忘れにならないで下さい，本当に……H. v. Kleist の詩とそれへの君の作曲を」と書いているように，その後作曲される筈だった。Phöbus の原稿は忘失されたが，Fouqué と Wilhelm Neumann の北ドイツの雑誌「Die Musen」1814年3号に載った文の原稿は，Fouqué が言うように作曲の為に存在していたようであり，詩句の Phöbus 誌のとの相違もその為と考えられはしないか？

「1. Der höhere Frieden」はK自ら「1792 oder 93.」の日付をつけていることから考えるとKの軍人時代の初め頃に成立し，Kの全く初期の詩であるが，この Phöbus に載せるにはやはりこの頃ある程度修正したものと考えられる。「5. Am S. v. H. (1808)」は Phöbus に載ったのと同一の（表題）なしの原稿が残っている詩であり，Jeanette v. Haza が1816年11月26日に L. Tieck に「私の母の為に最初の詩を創った」と語ったように Sophie v. Haza の事を歌ったのである。

5　Phöbus 11/12号は，これに載った「Über Kunstausstellungen und Kunstkritik」の署

名が「Dresden, 1809年2月21日. Ferdinand Hartmann」とあり，G. v. Kügelgen が「Zeitung f. d. elg. Welt」1809年3月10日に「……他の芸術家 Hartmann 氏が Phöbus の論文によって多くの根拠から明らかにしたように」とあるから1809年2月末に出版されたのである。この号にはKは「Der Schrecken im Bade. Eine Idylle」を載せた。

6 Caspar David Friedrich の Altarbild をめぐる新聞上の反目

Dresden ではどれほど短かかったにせよ，ドイツのロマン的文芸が生じた。これは絵画についても言える事である。というのは Runge と Friedrich が前期ロマン主義との直接の関係を持つ画家だったからである。しかし一面それによって Dresden は Weimar の敵手とみなされる事になった。というのはロマン主義が Goethe を神様扱いしていたにも拘らず，ロマン主義は全く Goethe の文芸批評からは理性と意志によって等閑視されていたからである。

1808年のクリスマスに Dresden で展示された C. D. Friedrich の「Landschaft mit Kreuz」に対して，F. W. B. v. Ramdohr が「Zeitung f. d. elg. Welt」1809年1月17日～21日に攻撃の批評論文を載せた。

「……Friedrich 氏の画は普通の道に反していて，それは新しい，私の少くとも今まで知らないままの風景画の意図を明らかにする，想像力豊かな情緒，豊かな芸術家たる亦を示し，大衆の意見を告げ，庶民全体に影響している……Friedrich 氏の構図に現在有力な学派が持っていた影響を認識することはどれほど可能だろう……」(L299a)

これについて恐らく争論が起るだろうと Chr. G. Körner (Dresden) が息子 Theodor Körner に宛てて1809年2月8日に「Ramdohr が Friedrich の Altarblatt についての長い，そして人々が言うように意地悪い批評を Zeitung f. d. elg. Welt に載せました，Kügelgen と Hartmann はそれについて非常に憤激しております。Hartmann は彼に〔Phöbus の中で〕答えるでしょう」(L299b) と書いている。

攻撃された Friedrich 自身が Johannes Schulze 宛に1809年2月8日に書いた手紙の中の Friedrich 自身の反駁，「貴殿は貴殿の最近の手紙に小生が貴殿に小生の Altarbild についての小生の考えを報ずるよう望んでおいででした，その頃はそれは小生の意のままになりませんでした……しかし現在小生は，小生の Bild に対して述べられている v. Ramdohr 氏の論文によって，Altarbild についての小生の考えを書き下してみる気になりました……岩山の頂上に，常緑の樅に囲まれて高く真直ぐに十字架が立っています，そして常緑のきづたが十字架の柱に巻きついています，輝きながら太陽が沈んでいき，夕焼の紫に映えて十字架のキリストが輝いています……」(L299d) は殆んどそのまま Hartmann の Phöbus の論文に再現されている。この Friedrich の手紙については，F. Passow も v. Voigt 夫人に2月24日に「Friedrich に対する Ramdohr の攻撃を私は読みませんでした，私が時間やお金では Elegant 誌や Freimüthige 誌にはかなわないからです，しかしおそらく Friedrich が Schulze に送った答，それが軽蔑すべきおしゃべり屋の行為を終らせるだろうと私は予想します」(L299c) と書いている。

翌1810年に Rühle が「Reise mit der Armee」の中で「当地の画家 Hartmann 氏は私よりこの頃先にやって来ていた，そして〔Ramdohr の論評と〕似た分析を Phöbus 11号に非常に器用にまた徹底的に行ったので，私はこの努力から大部分解放され，そして君に，私が完全に是認する彼の意見を参照するよう指示する事ができます」(L300c) と，Fouqué がまた「Pantheon」(1810年) の中で「すぐれたドイツの画家，Dresden の F. Hartmann 氏は Phöbus に造形美術作品の紹介批評を立派で意義深く説明したので，この論文の著者は彼が

あのすばらしい芸術家の言葉に賛同する以上にどんなもっとよい方法でも彼の見解や彼の立脚点を説明する事ができないと信じております」(L300d) と述べるその「Über Kunstausstellung und Kunstkritik」は Phöbus 11/12号で副題として「侍従 v. Ramdohr 氏が Altarblatt にと決められた Friedrich 氏の風景画についてと，風景画，比喩と神秘論について Zeitung f. d. elg. Welt の No. 12,13,14,15の中で掲載された機会に」とある。15頁にわたる論文は「そのような暴行に反抗する芸術家達からいつも返答がえられた，即ち学者は実に自分の作品がはっきり批判され，その作品の弱点があばかれ，分析され，正しい行き方を示されるのを甘受せねばならないと。しかしそのような言い方がなされたから，学者が絶えず学者達によって批判されながら，しかも芸術家が芸術家達によって公けに批判されないという重要な差異が見落されていた。というのはこの芸術批評家達がその批判において余りにもったいなすぎる僅かな絵を描く事は，彼らの心にただ誤謬を感じさせるだけであり……」あたりが主要点とみられるが，ことこまやかに Ramdohr に対して反論している。

この2月21日 Gerhard v. Kügelgen (Dresden) が A. Mahlmann 宛に Ramdohr の論文に憤慨して手紙を書いた後 Zeitung f. d. elg. Welt 3月10日に論文を載せた。

「この芸術家の感じ易い自己感情もあの実際殆んど思いやりのない論文によって侮辱され傷められようとも，その見解によれば無秩序の中に迷う芸術家を正しい道へ連れ戻すだろうという v. Ramdohr 氏の意図を用心して認知せねばならない……v. Ramdohr 氏は私をお許しなさるだろう，もし私が彼のやり方をこの点では独裁的といい，彼のその使命を認める事ができなくとも。彼に実際これを他の芸術家 Hartmann も Phöbus における論文によって非常に徹底的に証拠立てたように」(L301b)

重ねての反駁の為 Ramdohr は同じ Zeitung f. d. elg. Welt 3月20日に「〔私の〕あの批評に対して2つの論文が出た。一つは画家 Hartmann が Phöbus に，もう一つは画家 v. Kügelgen が同年3月10の Zeitung f. d. elg. Welt 49号に載せた。私は前者には触れないだろう，v. Kügelgen が暗に風刺するのでなくて，徹底的賛辞を与えていようとも……。私は私が賛同できない一本調子でまとめられた攻撃に決して答えないでしょう」(L301c) と述べている。

このように Ramdohr が Friedrich の画を軽蔑すべき馬鹿げたやり方で攻撃し，Hartmann がその Ramdohr を実に機智に富んだ，Ramdohr 自身の著作からの引用で反駁し，Kügelgen がそれに上乗りした形で Ramdohr の攻撃をした訳である。

Dresden の社交界の中では文芸がこうした風に談論されていたのだった。その中に勿論Kがいて，批評家達のやりとりに通暁していたのだろう。だから後に夕刊紙において画家 Friedrich に対するすばらしい観察を載せている。個人的にはKは Friedrich へよりは Hartmann により近い立場にいた。Hartmann の家でKは Tieck と知り合ったし，そうした関係から Phöbus に Hartmann の論文を載せたのだろう。

7 Hermann 戦争

Dresden でのKの不安，名声を求める事，成功への努力，「Phöbus」の心配が続くが，Kは時代が与える課題を作品で解決しようとする。その政治状勢を Hermann 戦争の中で恐ろしいほど充分に述べているが，それは当時「原稿の時も多くの人の手に渡って行った」(L303b) と言われている。

そもそもKが1808年6月7日 Cotta に「近々更にもう一つ出るでしょう。確かにこの事を閣下にお約束致します」(B 134)と書いている Hermann 戦争はその后完成し，G. Körner が息子 Theodor に1808年12月19日に「Kleist が Hermann と Varus を改作しました，そして作品はもうすでに朗読されました。しかし困った事にこの作品は今日の状勢と関連しており，それで出版できません。彼の作品が世界に結びつく事を私は好みません。全く現実の抑圧された関係を避ける為にこそ空想の国に逃れるという事が好まれるに違いありませんから」(L304a) と伝えている。

一年后に T. Körner (Freiburg) もこのテーマに取掛り 1809年11月22日に家族に宛てて「私は今音楽的な詩，Hermann 戦争を執筆中です，それを私は Timotheo の嗜好で取り扱っています」(L304b) と伝えている。

そしてKは1809年1月1日に Wien の Collin に宛てて，「貴君は同封の新しい Hermann 戦争という題の新しい劇をお受け取りになります，これが貴君に丁度 K. v. H. のようにお気に入るだろうと思っております。どうか王立劇場に上演を申出て下さい。もしそれが同劇場で採用されれば（現時点においてなお考慮の余地があれば）Käthchen よりもこの方を先に上演されるよう御配慮頂けるよう望んでおります，同じ位うまくできていますし，それにその成功は間違いのないものと信じております」(B 143) と希望をのべている。

Collin (Wien)は後にも述べる数回にわたるKの請求にも拘らず，1811年10月19日にやっと Wien の舞台監督に「v. Kleist 氏の Hermann 戦争〔の送付〕について，小生にどうかすぐ，この劇が Theater an der Wien で上演に適切と認められるかどうか知らせて欲しいのですが……すでに有名になった詩人のこの作は，小生が思っておりますように，難しすぎてすでに多くの定評ある天才が失敗した素材の控え目でまた高度に活動的な叙述によって抜群にすぐれています」(L303c) と上演を依頼している。

Kは例によって「文章の完成にあたって他の人によるその朗読を全く欠き得ないものと見ていた」(L305) が，それでこの Hermann 戦争の完成にあたっても Laun 夫人が伝える (1837年) 一つの挿話がある。即ち「私〔Laun 夫人〕に彼の親友の一人〔Hartmann〕が最近やっと告げたことは本当に特異である。Hermann 戦争の完成した原稿をもって丁度彼が或日 Hartmann の部屋にはいってきて，それを朗読してくれるように頼んだ。Kleist はその時言った，ああ僕はそんな事は A. Müller 君よりずっと旨くできるさ，でも全く上手なものを今は避けなくてはならないんだ。Müller の口では朗読の際，価値の低い青銅が純金に変る。みすぼらしい，許し難い文が僕の耳をさして，それがあたかもどんな人も僕にそれを朗読しなかったかのように非常に厌わしくなるのだ。君の朗読が僕のでき損いの個所を始めて本当に明るみの中に持ち出してくれ，そしてそれが全くこの際には僕に必要なのだ」(L305) と言ったとの事である。

Kは出版できないこの作品を原稿のまま多数筆写させ，それを上述のようにあちこちまわしたようであり，Altenstein にもその一部を献呈した。1809年1月1日の Altenstein への手紙にそれがみられる，「閣下の Berlin への御到着を小生はただ（というのはその事を我々は願う事ができますでしょう？）閣下に丁度今 Wien へ送った Hermann 戦争の写しをお渡ししたい為に待っております。すでに題名から，閣下はこの劇が今 Wien で上演されます以前のものとそれほど違った立場で作られてはいないことがお判りでしょう。そして閣下が我々にそれから曙光を導いて下さる日が我々にただ完全にすれば，小生はただ時代の中心

に投ずる作品だけを書きたいと思っております」(B144) と。

Kは Hermann 戦争の上演をしきりに望んでいて Wien の Collin 宛に重ねて手紙を出している。1809年2月22日に「……その後で別の時に第2の劇 Hermann 戦争の写しを尊敬の念をもって送らせて戴きました。小生はそれ以来貴君の書簡でお知らせ頂く幸運を得ませんでしたので，貴君に切に，もしできますなら次の便りでどうかこの二つの送付〔受取証と原稿〕が貴君の手にはいったかどうか知らせて下さるようお願い致します。特にこの後の方の為に，もしそれの引渡しが何か手違いで放置されたとすれば，この作品は他のどれよりも現下の要望に適しておりましたので，小生は悩んでおります，そしてもしどれほど楽々と可能だろうかという感情がこうした時代では上演される事が許される筈がないなら，全く実の所取戻したいとさえ考えざるを得ません」(B145) とそして4月20日に「でも君，Hermann 戦争はどうなっていますか？こうした時勢にアピールする事だけが唯一のねらいであるこの作品の上演をどれほど僕が熱望しているか簡単にお判りでしょう。すぐそれが上演されるだろうという返事を下さい。どんな条件もかまわないのです，小生はそれを全ドイツ人に贈ります。ぜひとも上演されるよう御配慮願います」(B149) とたて続けに出している。

Kの「Hermann 戦争」の成立の事情にからんで，複数の草案についてのくわしい報告は R. Samuel の「Eine unbekannte Fassung v. H. v. Kleists Hermannsschlacht」〔Jahrbuch d. dt. Schillerges. Jg. 1 (1957)〕に新しい考え方がでている。

8 Dresden 図書館における借出書 (1808/09年) によってもKの動静と作品の素材への好みが一部知られるが，それからみるとKがユダヤ文化や歴史，祖国プロシャの歴史の研究に従事していたと想像され，その中から Jerusalem の崩壊や Homburg 公子の素材を見つけたのだろう。

9 **Adam Müller との争い**

A. Müller は1805年10月以来 Dresden に暮していたが，当時 Dresden のおかれた政治的状態 (un isle entouré d'un océan ensagé) によって多くの不安な国々から上流の亡命者たちはここに集った。そしてここに住んでいた Haza 家の玄関が社交的なおしゃべりに開かれた。彼は Gentz を通してオースタリー公使に紹介されて Haza 家に住んでいたが，Berlin でロマン主義的なものでもてはやされたのが A. W. Schlegel の講義だったように，Dresden では A. Müller の講義が開かれるようになった。深遠さ，範囲，明確さで，特に多方面さの面で Schlegel よりまさっていた。しかも Müller の場合は，講演がその後印刷され公開されたので，より広い範囲の人を引きつけそれによって広い世間にロマン派のあらゆる展望を与えたのだった。Sophie Haza は美しい女主人として彼女の家を訪れる全ての客を彼女の優雅で機智に富んだやり方で魅了し，Loeben や Joh. v. Müller なども彼女の優美さにひかれたのだが，A. Müller も講演によって高まる成果の中に友人の妻への情熱が動きだしたのであろう。

Kが Dresden へ来た最初の日からすぐさま Müller との交際が始まった。彼にとってサロンでの Sophie v. Haza や Julie Kunze らの女性はかつてのスイスの Mädeli とは違った魅力で彼をひきつけた。そしてKにとって Haza の家は心地よい家であり彼はそこに住む人々全てと友人になった。A. Müller と Landrat v. Haza の関係は最初は自然のままだった

が1907年に公然とした決裂の状態になった。そして1807年11月20日 Landrat v. Haza は Sophie に対して Dresden の上級宗教裁判所で離婚訴訟を提起した。その離婚話は一年ほど放置され，Goethe の1808年7月27日の Karlsbad の日記の中にも見られるように，長い間社交界の噂になっていた。その継続が1808年9月に新たに繰返される事となった。

Sophie v. Haza の両親は Lewitz 近くの荘園 Pruschim に住んでいたが，娘の意図的離婚を理解しなかった。両親の彼女に宛てた手紙はその適切な成果を得たようにはみえない，更に財産上のことも問題になっていた，手紙では解決されない事もあって口頭の仲介者が必要だった。それには A. Müller がまずいのは勿論の事である。それ故この確かに楽でない仕事をKが引受けたのだった。1808年11月2日に彼は Ulrike に書く，「僕はたった今，貴姉がこの Dresden にお出での際僕が話していた Haza 夫人のことで Posen の在の Lewitz へ出発します……Haza 夫人は親切な立派な方です。僕が彼女のためにした最初の事は最后のこともなすのを全く不可欠としております」（B 140）。

即ちKは Haza 夫人に頼まれて出かけたのだが，Haza 夫婦の和解の意味で努力した。P. Hoffmann の「Ulrike von Kleist über ihren Bruder Heinrich」(L308a) によると「Kleist もあらゆる事をして Haza 夫妻を再び結び合わせようとした，その為二人の間には非常に本気な歩みよりが生じて来たとの事である」。

Haza 夫人がKに託した更に詳細な内容を我々は何も知らない，だから，Kの最初の使命は Sophie の両親の気持を変えさせ，離婚を納得させる事であり，第二には Lewitz で財産上の問題について交渉したのだという正反対の R. Steig (H. v. Kleists Berliner Kämpfe) に代表されるような意見もある。

Kは Haza 夫妻を和解させようと努力した結果，彼自身 Haza 夫人への親近感を強め，本気になって夫人に心を寄せるようになったのであった。一方 Müller の性格への疑問も嵩じ始め，Müller に対して Haza 夫人との関係から非常な憎悪を感じることとなった。事実1808年11月から1809年までの時期に A. Müller とKの間は非常に険悪となっている。

Landrat v. Haza は確実に妻との和解に努力した。しかし Sophie にはそれができなかった。年令35才，長女 Jeanette 13才以下4人の子の母親が長い年月の結婚生活の後全ての過去を捨て，5才年下の A. Müller への心の傾斜に従うため夫の和解の手を振り切ったのであった。

そしてK自身はその為精神の平衡を失って，Brühl のテラスで女友達 Rühle 夫人に見せたような情景となる。

「二人〔Kと Rühle 夫人〕はここで或日，お互いに黙って行ったり来たりぶらぶらしていたが，彼が突然叫ぶ，そうそう，絶対だ，Müller は死なねばならぬ，僕が彼を水に投げ込んでやる，もし彼が僕に夫人を進んでゆずってくれないなら。Rühle 夫人は，Kleist が女性の事で激昂したのをそれまで見た事がなかったので驚いて跳びすさり，もう一度その言葉を聞き返す。彼がそれにも気づかぬ様子なので返答の仕様もない」(L309)。

そしてその後にKが Elbe 河の橋で Müller と会った時，「彼は Müller を鉄の胸壁ごしに河の流れへ突落そうと本気になってやってみた」〔疑わしい言い伝え〕(L309) ことがあった。また「彼は A. Müller には全く当時何としても我慢できなかった。そして朗読の下手な Müller の性癖を嘲笑したのだった。ある晩始めて Müller は鼻声で Käthchen を朗読した際，Kleist 自身は出席せず，翌朝 Tieck が何故出席していなかったかと聞いた時，彼はこう答えた，人が僕の作品をどれほどひどく扱うか聞いていられる筈はないだろう？」

(L309) というような事件もあったのである。

W. Löwe 伝えるところでもKの当時の「Müller との交際は決して親しいものでなかったようである。E. v. Pfuel は Müller を殆んど評価していず，彼の言によれば，以前 Müller と親交のあった Kleist の家で会ったに過ぎない」(L310) と伝えている。

にもかかわらずKは Altenstein に1809年1月1日，この頃の Müller の様子を報告し，「閣下があらゆる人材を周りに結集しようと以前よりもっと熱心になさっている今，小生は閣下に友人の一人……A. Müller を知らずに過ごさせるという事はできません。閣下は多分新聞や雑誌で，この特別な精神の持主が，この冬，社交クラブで政治経済の講演の講座を始めた事は御存知でしょう。殆んど全く外交団体的なのですが (de Bourgoing を除いてですが)，週に二度 Bernh. v. Weimar 公子の住居に彼を囲んで集まるのです……彼の立場は当地では成程公的には Weimar 公子の教師でありますが彼に魅力を感じさせる諸条件がどれほどかという事はよく解り兼ねますが，Weimar 公は彼の息子の教育が完全に終了した後彼を採用しようというつもりなのです。しかし彼が祖国の再生にとった大きな，熱烈な精神的貢献や祖国の再生を論ずる彼の新聞への充分な精神的な肩入れは，彼の力に適合する領域に配置された場合に金銭上の利益は度外視してその呼びかけに応じるだろうという事を何の疑惑もなく表わしております。彼はどういう目的で小生があの講義を取りつけたか大体の所を充分理解はしている筈ですが，この手紙に関しては何も知りません。もし小生があえてお待ちする閣下の御親切な返事の中に，閣下自らが中心になっておられる仕事の範囲の中にポストを得られるというようなお言葉があって，小生の尽力が彼を元気づけられるのなら，どんなに幸せな事でありましょう」(B 144) と Müller の就職を頼んでおり，Müller 自身の方からもKに友誼的に接していた事をもうかがわせる。

それが Dresden における K と Müller の関係の最終的爆発〔「昨日の事件」(L311) とある〕は4月4日に起ったのだが，1809年4月5日の Müller より Rühle と Pfuel 宛書簡と，Kの Walther 宛書簡 (B 146) からそれをうかがう事ができる。

Müller は「僅かな収入さえはいらなくなった〔1808年〕6月以来，僕は Phöbus の全負債の一部を僕自身の乏しい資産から支払いました，一つにはその際の督促や度々の手形差押えの脅かしを君達〔Pfuel と Rühle〕のどちらにも負担をかける事なく耐えて来ました。僕の他には誰もこの不幸な事態を気にもかけず，真剣に心配する事もなかった。Phöbus は5月末で中止になったろうし，損失も大きくそれに加えて非難中傷も起ったでしょう，——誰も僕に協力しなかった，僕は事実上最後の状態の時出版者を一人世話した，それによって少くとも130 Taler と企業の名誉は救われたのです」(L311) と言う。成程1808年10月末，Walther を Phöbus の後半の出版社として，Walther は報酬を一銭も支払わず，Müller が Walther に予約の未回収金を含めて全てを僅か130 Taler の額でゆずるという条件で，獲得するのに成功している。

この間の事情についてはKは1809年4月になって始めて知って「Müller の編集の債権をひっくるめて136 Rth.〔Kによれば130 Taler でなく136 Taler となっている〕で，貴殿〔Walther〕に譲渡された契約が全く小生の了解なしに結ばれた事を念の為申し上げておかねばなりません。貴殿がこの事情を御存知なく，また Müller が貴殿に，小生もこの処置について知っていると確言した事は疑いもないことでしょう」(B 146) と言っている。

とにかく Müller は Phöbus についてその他にもKに相談せず独断で行った事が数多くあ

る。それを彼自身も言っている，「製紙業者 Reinhardt が我々と契約を結んでいた，そして彼の力で我々は凡ゆる方法で損害賠償金を受取らせる事ができた。即ち僕はこの契約を廃棄し，その操作でそれ以上の損失を免れた。誰も僕に助力しなかった。即ち，僕はそれ故当然のように，もう何も得るものがなかったので，そして僕が更にその上今年3月中旬にすでに 212 Taler を現金で立替え，更に 230 Taler の負債を負わねばならなかったので，また一人で操作しました」(L311) と。

更に Müller は自分が他の同人に迷惑をかけない為にこれほど献身的に努力しているのにKは一方的に自分を非難するばかりか，更に「まだ230 Taler の債務があったので，v. Kleist 氏は何の要求も出来ぬ筈なのに，債務の以前の暗黙の支払に対してこの僅かの補償を，利益を挙げている Walther への契約の以前の売却によって生じたたかだが50 Taler の不測の損失分として Kleist 氏に Phöbus の第2巻への手うちから償おうとする，つまり僕の分け前から償おうという事になった」(L311) という。Müller は自分が精一杯誠意をつくしているのにそれに対して返って来るのは罵言しかないというのが，普通になってしまっているから，Rühle と Pfuel の沈黙に感謝しながら「Kleist にだけ責任のあるいろいろの事情」(L311) について二人に第三者の立場で正邪を判別してくれと二項目を出している。

「1　貴君方は，僕と Kleist の間に投げられるさいころが僕の否と出たら，可能なら230 Taler の未払の債務を引受けて，僕が放棄した時すでに立替えた 212 Taler を（精算の結果生じているように）僕の残りの個人的債務の償還に支払って下さるつもりがおありでしょうか？

2　貴方がたは僕が残る場合には，僕に補償金全部の代りに Phöbus の継続とそれに関する利益だけを渡して下さろうとお思いですか？」(L311)

そして二人の返答によって Müller はこの二人の事もKとの話し合いで片付けて Rühle と Pfuel が，Kと Müller が「極度に追いつめられて，はじめて思いきって話そうと思った債務の受継ぎへ督励するほか自然の道は何もない」(L311) と思っている。

とにかくこういう訳で Müller は結局「僕は君達に今后の Phöbus の継続に際して，又は君達が今度のような時態に立ち至らないですむ何かの将来の共同企業には，僕以外の高遠な，勤勉な，君達の利害にも心を配る管理人を望みます」(L311) と開き直っている。が Kleist も同様に「このように非社交的な〔Müller の〕行為によって，更にここでは述べるべきでないと思われるその他様々な態度によって，これまで我々の間に存在して来た好ましい意志の疏通は著しく妨げられました。それ故もし貴殿〔Walther〕が，Müller の小生に確言しておりますように，今后 Phöbus を出版しようとお考えなら，小生が編集から手を引くか，Müller 以外の別の共同編集者を探すかのどちらかしあり得ません」(B146) と頑な態度を示している。

こうしてKと Müller は激しい争論の結果，Müller に面と向って「僕は武器以外で答える事はできない」と言い，決斗という次第になってしまった。その決斗は友人達によって表面的には調停され，実行は避けられたのであったが。(Sembdner は「Müller との決斗要求にまで行きついた」と述べている。)

このKと Müller の危機が頂点に達した時 Müller と Sophie の間の事件も決断の時を迎えた。つまり Peter v. Haza は妻が自分の許に戻り子供の所へ帰るという希望をあきらめてはいなかったのに，Sophie は上級裁判所への次の手紙で自分の気持を明らかにしたのだった。

「私がすでに今年4月7日に徹底的な熟慮の結果明らかにしましたのは，私が夫 Landrat v. Haza の許に帰る事はできないという事でございます。夫から離れる事によってのみ私の健康やある程度の安らぎを再び得る希望を抱く事ができます故，その事を今日ここに再び繰り返すしかありません。Magnific の皆様に私は，従って，進んで 35 rtr. の金をお払いして申告致します。

Dresden，1809年5月12日　Sophie v. Haza」と。

10 Kと Müller の決裂は第2年度の Phöbus の続刊の計画をもはや話題にさえできなくしまたKは Phöbus への関心も殆んど失くしてしまった。しかも仏墺戦争の勃発によってそれ以前の事情は全て崩れてしまった。Dresden の置かれた状勢が変ってしまったのだった。Kは Prag を目指して去り，そこで政治的な週刊誌を出そうと志し，Müller はオースタリー軍の Dresden 占領で拘束され，7月に Dresden を再占領した Sachsen 軍から反逆人として追放された。そのため Phöbus 失敗后非常に経済的な苦境にあったので Dresden から Berlin へと徒歩で去って行ったのだった。

しかしこれほどまでの二人の破局が，一年后の Berlin での再会後は Berliner Abendblätter を協力して出す事になるあたり，常人では理解できない面がある。

11 結果的にみてKは Phöbus の発行されている間，A. Müller が講演や著述で文芸に対する考えを広めるのを助けた。Phöbus にはKと Müller の政治的見解を弁護する詭弁と共に多くのすぐれた文学的なものも内容豊かに包含されていた。

Phöbus が1年以上続かなかった事にはいろいろ理由があげられる。一つには自費出版に一般的な現象で，疑いもない経済的基盤のもろさである。又協力者に関しても誤まった希望的な見通しを持っていた。頼りにしていた Goethe, Wieland, Johannes v. Müller, Gentz, Jean Paul, F. Schlegel, Tieck, Collin といった著名人が参加せず，雑誌が予告した目的とは異って専ら Dresden の小さな仲間，しかも実質的にはただ A. Müller とKのみによって支えられている事が明らかになれば読者の失望をまぬがれ得ぬのは当然であった。幾分誇張癖のある。だが一方器用で才気煥発な Müller の仕事は或程度人の心を引きはしたが，Kの言葉は余りにも素気なく，当時の人々に耳馴れぬ響きを持っていたし，世間にそれほど知られた詩人でもなかった。更に L. Wieland も「Prometheus, Jason, Phöbus, Selene, Isis, Teutona, Freimüthige, Morgenblatt, Teutscher Merkur, Zeitung f. d. elg. Welt, Asts Journal für Wissenschaft und Kunst などなど，何と多くの年鑑！ああ，ドイツ文学よ！」と深く嘆息したような雑誌，新聞との猛烈な競争に伍して行かねばならないという事情もあった。

12 「この雑誌が十分に人の関心を引き得ずに中絶せねばならなかった事は残念な事」(L 303 a) であったが，現代の目からふり返ってみると Phöbus の価値は特にKの寄稿にあったと見てよい。Phöbus によってのみ Guiskard 断篇が伝えられ，Käthchen, Krug, Penthesilea の前段階を考え得ることが出来るのである。また Goethe が当時非常に高く評価した A. Müller の寄稿は彼の，今日でも価値のあるすぐれた批評的，哲学的才能を示している。その点からみると当時数多く乱立した諸雑誌の中で，難しい仕事乍ら Phöbus の異質のものから文芸の純粋さを守ろうとした Müller の努力の現われとみる事もできる。

13　伯母（v. Massow 夫人）の死——1809年4月

1809年1月11日に死亡したKの伯母 v. Massow 夫人の遺言状が1月18日に公示され，Kには4月5日に知らされた。その中に「2. Heinrich v. Kleist……400 Rth.」(L314) とあって，Kは4月8日に姉 Ulrike に手紙し，会ってその事につき話し合おうとする。

Prag の「旅行費用のために，僕が相続した僅かの遺産から少々前もって受取りたいのです。何らかの方法で……僕の所へ持って来て下さるわけにはゆきませんか？ ただの50か30 Rth. でもいいのですが。……僕らが遅くとも水曜か木曜（ぎりぎり）に会えるよう考えて下さい。正午に到着し，午后と夕方はいっしょに過ごし，夜はそこで泊らねばなりません」(B147)。

そして手紙にある水曜，木曜は4月12日，13日に当たるが，その次の4月14日にKは Ulrike に会って遺産をどういう風に受け取るか話し合った上，4月14日付で Frankfurt an der Oder の裁判所宛に手紙を出す，「小生が，……〔遺言〕の公示記録を読んで，吾が最愛の伯母 Maj. v. Massow 夫人の処置に対して何の異議も持ちません事をここに署名と印章を以って明らかにし，証明致します」(B148) と。

その結果Kは Phöbus 解散後も，旅費が授かって Wien 目指して出発できたのである。